

『楚辞体』詩について

—— 艸山集研究・四 ——

有 賀 要 延

楚辞体（艸山集卷二〇・雑体詩）

有_レ居_兮山陰　下平声十二侵韻

水遠_兮雲深

杖_レ藜_兮欲_レ往

渺茫_兮難_レ尋

我_レ仮_レ繞_レ斯遊

又何人同_レ心

この詩は脚韻を下平声十二侵韻で踏む五言詩であり、元政上人自身の上求菩提の心相を述べたものである。先づ字義について見れば、居とは本地幽微の居であり所求の寂光土を意味する。山陰とは山の北側、山に懷かれた意味をも含めて、山陰（山かげ）という。山とは靈山になぞらえるもので、之については日蓮・波木井殿御書の一節を思い出す。

此法華経は三途河にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり、靈山へ参る橋也。靈山へましまして

『楚辞体』詩について（有 賀）

良_{うしろ}の廊_{おちしろ}にて尋させ給へ、必待奉るべく候（以下略）

此の御書は入滅の六日前の弘安五年十月七日、池上において波木井実長をはじめ弟子檀那にあてて記したもので、遺言の書でもある。南面を陽、北面を陰という時、此処に言う良（北東）は陰の位置に含まれる。元政上人は宗祖日蓮聖人の御遺文の此の一節を心に置いていたと見ることも出来る。更に又、元政上人にとって、悟りは自内証であり、陽において語るべきものではなく、陰の位にあつて内観すべきものであるが故に、山陰の二字に甚深の幽意をうかがい知るものである。即ち第一句は仏陀を最上の大隠と讃嘆せる上人所求の静閑処、究竟の幽処を言うものである。第二句は此の「居」がはるかに遠く幽玄の境であると述べる。水遠とは江水のはるかに遠く流れるをまで、水遠山長と熟語にして用いられることが多く、地界の広くはてなき様を言う。雲深とは天空の行きつくところを知らず極りなきをいう。幽玄懸曠なるさま

『楚辞体』詩について（有 賀）

を、地に即して水遠と言ひ、天に即して雲深と詠じているのである。第三句の「蔡を杖して」とは僧侶として修行を意味している。即ち元政上人は、三学兼修、自行重視の基本姿勢を此の句に秘めて示す。しかしながら、その往く途は渺茫として涯なく、尋ね至ることはなかなか困難である、と言う。この第四句は法華經提婆品において舍利弗が龍女に問うた「仏道懸曠、逕無量劫、勤苦積行、具修諸度」の語と同じ観を呈している。龍女即成を説く実大乘の法華經を持つ政師が、何故に二乗人の通念と同じに見られる表現句を此処に用いたのであるうか、勿論、仏道を成就することは安易な心では之を達すべくもないことである。「渺茫」の二字は政師の行願の心相を代弁するものであり、此の二乗的表現の根底を探るならば、其処には嚴肅なる持律と内省の教風とを秘めていると言うことが出来る。避雨紀譚に、

問師笑不_レ爲_二化佗_一。日我無_二化佗能_一。日尚無五十展軀人乎。日隨力演說誰不能也、今与子談是隨力耳、只如以細網小鮮。若遇_二巨魚_一我恐破網。是以不_レ爲、我不_レ退菩提心、必至不退位。其時現_二身百界_一広度衆生。如張大網_二亘乎巨海_一。何魚不_レ入_二其中_一哉。吾不_レ患化佗不急、患智德不_レ聚於身也。

と述べている如く、内法事觀の妙処をつがんに爲に専ら自行を面となし、化他は隨力演說の分であるとし、むしろ智德の身に聚まらざるを患うる心が「渺茫兮離尋」と言わしめているのである。されば又、上人は文殊の智よりも、普賢の行願にその心を置いていたのである。

さて、第五・第六の両句を釈するに先立ちて楚辞体について述べなければならない。

楚辞とは楚の辞（ことば）ということであるが、此処に楚辞というは、楚の屈原の辞賦、その弟子宋玉及び門下後人が屈原を追弔思慕して、屈原の作に倣つて其の志を述べた辞賦を言い、之等を漢の劉向が輯したものが書名としての楚辞で十七章から成っている。古代中国の最初の詩として現在知られているのは詩経である。詩経には詩の六義の一体として先づ国風がある。国風とは諸国の民謡をいうものであり、又、人を感じしめること風の物を動かすが如き故に風と言う。之に正風として周南・召南の二五篇、変風として邶より豳に至る一三六篇がある。古に楚は南蛮として中原からは斥けられていた。従つて詩経には楚風としての篇はない。しかしながら、江漢の間はみな楚地であつて、周の文王の徳化が南に行われ、楚地の風と見られる漢広三章は周南に、江有汜三章は召南に列しており、十五国風の先位にある。之に依つて見れば、楚風は詩中に其の篇目においてははいないが、實質には国風の首にその位置を占めているのである。

風雅（詩経）既に亡び、一たび變じて離騷と（屈原の楚辞）となる。いわれているのであるが、この詩経より楚辞に至る

過渡的位置におかれるものとして、楚狂接輿歌と孺子滄浪歌があげられている。即ち、

○楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而。

○有孺子歌曰、滄之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足。

詩の四言の本体を變じて兮字を以て読みとしているは、まさに楚辭体の先驅をなすものである、と言われている。

屈原は楚に仕え、誠を至して忠を尽し、潔を履みて智を竭し、志節あるもかえって同列の士大夫の嫉讒に遭って疎んぜられた。耿介の志やるところなく、憂国の情は之を辞に発し、幽思の言は以て賦体の門をひらくに至った。弟子の宋玉はまた能く師の意を推し、賦を作して其の遺響を嗣ぎ、此処に賦体の完成を見るに至ったのである。屈原、宋玉は共に楚人であり、楚の方言を用いている故に楚辭というのであるが、その特徴は兮字が読みの辞として登場したことである。

此の兮(ケイ)字は、一には助辞、韻文の語句の間または末尾にそえて一時語勢を止めて更に発揚するに用い、二には後置の字で「の」に用いて「之」にあてて。

楚辭十七章のうち、大招第十は兮字に替えて只字を置き、天問第三、卜居第六、漁父第七の各三章が無兮字の雜言体であるほかは、すべてに兮字を置いているのであるが、全篇を

『楚辭体』詩について(有賀)

通じて一定句形のみを以て構成されているわけではなく、其の幹となる句形は次の如くに分類することが出来る。

第一類 句形

○○○○○○兮

○離騷經(屈原) ○九章(惜誦、涉江、哀郢、抽思、思美人、惜往日、悲回風)(屈原) ○九弁(宋玉) ○惜誓(不知誰) ○七諫(沈江、怨世、怨思、自悲、哀命、謬諫)(東方朔) ○哀時命(嚴夫子) ○九歎(劉向) ○遠游(屈原)

第二類 句形

○○○○兮

○九章(懷沙)(屈原) ○七諫(初放)(東方朔) ○九懷(株昭)(王褒) ○招隱士(淮南小山)

第三類 句形

○○○○兮○○

○九歌(少司命、山鬼、國殇)(屈原)

○九思(逢尤)(王逸)

第四類 句形

○○○○兮○○

○九歌(東皇太一、雪中君、湘君、湘夫人、大司命、東君、河伯)(屈原) ○九懷(危俊、昭世、思忠、陶壅)(——) ○九思(疾世、遭厄、傷時、守志)(王逸)

第五類 句形

○○○○

○九懷(匡機、通路、尊嘉、蓄英)(王褒) ○九歌(礼魂)(屈原) ○九思(憫上、悼乱、哀歲)(王逸)

『楚辞体』詩について（有賀）

第六類 句形 ○○○○○○○○兮

○九章（橘類）（屈原）

第七類 句形 ○○○○○○○○只

○大招（屈原）

第八類 句形 無兮字雜言体

○天問（屈原）○卜居（屈原）○漁父（屈原）

以上の分類によって見るに、元政上人が楚辞体と題した此の詩は、楚辞の主要条件としての兮字を置いており、第五句第六句が無兮字の五言であるにせよ、第五類に該当する。そして、五言六句という短い句数の中において、仏道における師自身の基本的姿勢を述べるのみならず、楚辞の原点を捉え、其の詩風をも能く究めつくしているのである。ちなみに第五類の九思悼乱より詩句の一部を挙げるならば、

伊余兮念茲 奔遁兮隱居

將升兮高山 上有兮猿猿

欲入兮深谷 下有兮魍蛇

左見兮鳴鵒 右睹兮呼泉

惶悸兮失氣 踊躍兮距跳（下略）

部分ではあるが充分に賞翫せられたい。この詩賦のもつ格調は、語句の異りはあっても、元政上人は血となし肉となして「楚辞体」詩に写し出しているのである。楚辞は屈原の離騷經に始まり全篇を通じて慨世の詩である。そして此の「楚辞

体」詩も亦、第五句第六句の「我仮繞斯遊、又何人同レ心」と賦す中に、情に執して恚痴を長ずる無為の学、法を販いて利を射めて日日に奔馳する輩、あるいは僧流の衰え、世法の墮落に対する慨嘆が秘められているのである。

此の詩は楚辞に擬しての試みであった。其の深奥を採り、格調の高さは楚辞に最適するものである。

1 日蓮遺文昭和定本巻二・P.1932

2 元政・扶桑隱逸伝叙

3 艸山集巻二七・日全本 P.569

4 元政・聖凡唱和集序

5 詩人玉屑巻二・詩体上

6 論語・微子

7 孟子・離婁上

8 楚辞の先驅をなすものとして接輿歌と滄浪歌を挙げたが、兮字を置くものの中、古詩源巻一・古逸の次の二首も注目に値いするものである。

楚聘歌「大道隱兮礼為基、賢人竄兮將待時 天下如一兮欲何之」

越人歌「今夕何夕兮寧洲中流、今日何日兮得与王子同舟、蒙羞被好兮不訾詬恥、心幾煩而不絶兮得知王子 山有木兮木有枝、心說君兮君不知」

楚聘歌は内容から見て、むしろ屈原の以後のものとも思われるものであるが、少くとも楚辞の形を有しているものである。越人歌は楚より南方の地の歌であって、楚辞への類似性をうかがい知ることが出来る。

（身延山短期大学卒）